

研究展望

張伯端『悟眞篇』の研究史と考證

吾妻重二

北宋の張伯端が著わした『悟眞篇』は、道教修養法の一つをなす内丹術の主要經典である。筆者はかつて『悟眞篇』の内丹思想」という小論を書いたことがあり、また近刊の平河出版社『道教事典』でも關連項目を幾つか擔當する機會をもった。本稿はその際の調査から生まれた副産物にほかならない。重要だが難解極まる書として我々を悩ます『悟眞篇』理解の一助となればと思ひ、筆をとることにした。

本文中では『正』という略記で正統道藏を、續く漢數字で壹灣藝文印書館縮印本の冊數を示した。『輯』は道藏輯要、『精』は道藏精華をあらわす。研究・關連文獻については、煩を避けるために著者名(敬稱略)と發行年だけを擧げたので、詳しくは文末のリストを参照されたい。⁽¹⁾

一 『悟眞篇』研究史とその評價

1 研究文獻について

張伯端(九八七—一〇八二、一名用成)は字を平叔、號を紫陽という。「悟眞篇本末事蹟」(『紫陽真人悟眞直指詳說三乘祕要』所收、以下『三乘祕要』と略稱、『正』四)によれば天台纓絡街の人であるが、最近の樊光春一九九一によれば、台州臨海の人という。その『悟眞篇』の内容は、版本によってやや出入があるものの、おおむね七言律詩十六首、七言絶句六十四首、五言絶句一首、西江月十二首、禪宗歌頌詩曲雜言三十二首の合計百二十五首の詩歌韻文を中心とし、これに若干の詩と散文が加わっている。ただし、詩歌の排列順序は、テキストによって著しく違ふ。そのことは吾妻重二一九八八に詳しい。

『悟眞篇』はまもなく、陳致虚『上要子金丹大要』卷一（『正四〇』）が、修道の人は「要かみず當に參同契・悟眞篇を以て主と爲すべし」と説くように、「周易參同契」と並ぶ道教養生術の聖典となった。その影響は、現代中國の「氣功」にまで及んでいる。

さて、これまで發表された論考についてコメントを加えておこう。劉師培一九三四は近代における『悟眞篇』研究としては早期のもので、翁葆光の『悟眞篇注』三卷についての文獻學的解題である。宮川尙志一九五四は、清の全眞教龍門派の道士劉一明による『悟眞直指』を紹介し、あわせて道家南宗すなわち張伯端に始まる南宋の内丹派を概述する。

今井宇三郎一九六一は、宮川氏の論を承けて道家南宗の系譜を検討したもので、道士の著作や關係資料に当たって師承關係の有無を考察している。このうち、劉海蟾―張伯端の系譜を否定したのは頷けるが、薛道光―陳楠の系譜まで否定したのは賛成しがたい。陳楠は實はその「羅浮翠虛吟」（『翠虛篇』所收、『正四〇』）において、薛道光からの師受を告白しているからである。この点については吾妻重二一九八八を参照されたい。續く今井一九六二は、『悟眞篇』の諸注の成立と構成および思想について論じ、眞鉛二坎三の中文の一、眞汞

張伯端『悟眞篇』の研究史と考證（吾妻）

Ⅱ離三の中文の一という、重要な指摘をおこなっている。

柳存仁一九七七は、『悟眞篇』の諸注について文獻學的考證を加えた札記ふうの研究。テキストの異同や時代考證の點で鋭い指摘と問題提起を含む。ただし、張伯端の生卒年を百年ほど後にずらし、一〇七六頃〜一一五五頃とするのは無理であろう。もしこの説が正しいとすれば、本稿文末の年表に掲げる諸事項が根本的にひっくり返ってしまふからである。

以上は、『悟眞篇』についての先驅的な研究である。これらはおおむね『悟眞篇』周邊の諸事情をめぐる論考が多く、養生技法についての實質的考察に缺けているため、隔靴搔痒の感を免れない。内丹という養生術について漠とした認識しかなかった草創期のことであってみれば、それも致し方のないことであつたらう。身體觀や具體的技法にまで踏み込んだ研究が現れるのは、内丹研究全般が隆盛に向かう一九八〇年代になってからである。これにともない、『悟眞篇』を宋代道教史あるいは内丹史の流れの中に位置づける歴史的研究も本格化してきた。

陳兵一九八五は、博學緻密な事實考證にもとづく道家南宗研究で、北宗すなわち全眞教との融合過程についても詳論を加えている。福井文雅一九八七は、數本のテキストの調査に

より、『悟眞篇』巻末に「禪宗歌頌詩曲雜言」が附いているものが元來の體裁であり、したがって『悟眞篇』は本來、禪宗と深い關係をもつ宗教書であつたと指摘する。

吾妻重二一九八八は、こういつた従來の成果を踏まえて、『悟眞篇』の諸テキストの構成、張伯端の他の著作、あるいはいわゆる「性命兼修」説などについて考察を加える。内丹思想・技法については翁葆光の注および「悟眞直指詳説」(『三乘祕要』所収)、さらに戴起宗疏を主な據り所とする。今までのところ、包括的な基礎研究としては唯一のものである。なお、通行テキストと『道樞』巻一八所載の「悟眞篇」の異同を論じたものとして宮澤正順一九八八があるが、内丹思想について特に言及はない。

研究の數量において群を抜いているのは中國である。最近の氣功ブームも手傳つて、議論百出の感がある。卿希泰一九八八は張伯端から白玉蟾に至る、いわゆる南宗五祖の傳記的研究。李遠國一九八八の第四章「兩宋時期内丹派南宗概述」は、傳記研究とともに『悟眞篇』の内丹思想を紹介する。もつとも、『玉清金笥青華祕文金寶内煉丹訣』三卷(『青華祕文』)を多用するのは賛成できない。本書は張伯端撰と傳えられるが、後述するように、實は明代の僞作と考えられるからであ

る。また李養正一九八九の第六章、徐兆仁一九九一の歴史篇第四章および理論篇第五章、また任繼愈一九九〇の第十三章も『悟眞篇』について記述している。

現在のところ、中國の『悟眞篇』研究において最も參考に値するのは卿希泰一九九二の第七章「道教在北宋的復興和發展」、および王沐一九九〇の論文「悟眞篇丹法要旨」「悟眞篇丹法源流」であろう。いずれも歴史的、思想的・術語解彩に富む。ただ、不満を言えば、『悟眞篇』の理論・術語解釋の點において十分な妥當性を缺くように思われる。特に『青華祕文』を援用すること、また王沐氏のように、素性の明らかでない「紫陽八脈考」(李時珍『奇經八脈考』引)を用いるのは問題であろう。現在の中國の學界では全般的にテキスト・クリティックの面が弱いように思われるのだが、いかがであろうか。このほか、樊光春一九九一は張伯端の傳記研究として有用であり、嚴振非一九九二はこれに若干の反論を試みている。李明叔一九八八は内丹と禪の交渉を專論するが、論旨は粗雑である。丁貽莊一九八九は筆者未見。

歐米においては、『悟眞篇』の英譯としてデービス一九三九とクリアリー一九八七がある。デービスは『周易參同契』の翻譯(一九三三年)で知られる學者だが、ここでは『悟眞

篇』を外丹書と見るといふ誤りを犯している。クリアリーのものは本文と劉一明の注を譯しているが、事實關係の調査や術語理解の點で不用意さが目立つことは、フセインの書評が指摘する通りである。⁽²⁾ 歐米においても、『悟眞篇』の内丹思想の研究は緒に附いたばかりと見受けられる。

2 関連文獻について

『悟眞篇』に關連をもつ諸研究も多い。詳しくは文獻リストを参照して頂くこととして、ここでは主要なものに限って論評したい。

マスペロー一九三七は、道教養生術に關する古典的名著であり、『悟眞篇』を考える際にも參考にするに足る。というのも、そこに考察された唐・五代の服氣、行氣、鍊氣、用氣といった氣の技法は、内丹養生術の祖型をなすものだからである。

ニーダム一九八三およびフセイン一九八四は、内丹研究として劃期的なものと言える大作である。特にフセイン氏のもの、は、『悟眞篇』の直前に成立したと思われる鍾呂派の文獻『秘傳正陽真人靈寶畢法』（略稱『靈寶畢法』、『正』四七）を中心に、内丹技法について初めて信頼しうる記述をおこない、

張伯端『悟眞篇』の研究史と考證（吾妻）

福井文雅氏の紹介を通じて學界に大きな影響を與えた。李遠國一九八五は、内丹の學的研究としては中國で最初のもの、坂内榮夫一九八五は、内丹の專論としては日本で初めてのものである。

フセインの影響を受けたものとしては石田秀實一九八七がある。『靈寶畢法』および同系統の『鍾呂傳道集』（『修眞十書』所收、『正』七）を用いた着實な研究で、中國傳統醫學との關連など、従來になかった創見を多く含む。これについては吾妻重二の書評がある。

このほか、坂出祥伸一九八八は内丹前史に關する最新の研究であり、内觀存思から内丹へ、あるいは外丹から内丹へという歴史過程の變遷を手際よく整理している。外丹と内丹の關係については孟乃昌一九八九a b、一九九〇a bが詳しい。太原工業大學教授の孟氏は、名著『道藏源流考』、同『續攷』の作者陳國符の門下であり、外内丹の術語・理論をめぐる一連の研究は注目に値する。勞餘一九八八も同じ方面の研究である。李遠國一九八七は氣功・内丹に關する資料集。卷末の「名詞匯釋編」は術語辭典として使える。

三浦國雄一九八八は、近世の文人が養生術にいかにか熱中していたかを南宋の陸游に即して論じたユニークな研究。横手

裕一九九〇は、道家南宗の内丹術を全眞教に持ち込んだ元初
の李道純について考察したもの。北宗と南宗の系譜が形成さ
れる過程を追究した點で教えられることが多い。

なお、伊藤光遠一九八七（復刻本）は、清初の全眞教龍門
派の柳華陽による『金仙證論』を讀み下し、説明を加えたも
の。古い著作であるが、内丹ないし氣功實踐の手引きとして
今なお役にたつ。卷頭に坂出祥伸氏の解説がある。馬濟人一
九八三も氣功養生術の通史として優れている。

二 『悟眞篇』の注釋

『悟眞篇』には後世、さまざまな注釋が書かれた。歌訣が
大部分を占める『悟眞篇』の理解には、是非とも注による解
説を参照することが必要なので、以下に紹介しておく。

- 一、『悟眞篇注疏』八卷、宋・翁葆光注 元・戴起宗疏
（『正』四）。
- 二、『悟眞篇三注』五卷 宋・翁葆光〔表題は薛道光〕／陸
墅／元・陳致虛注（『正』四、『輯』奎、『精』六）。
- 三、『悟眞篇注釋』三卷 宋・翁葆光注（『正』四）。
- 四、『悟眞篇講義』七卷 宋・夏宗禹注（『正』四）。
- 五、『悟眞篇』五卷 宋・葉土表／袁公輔／翁葆光等注

（『修真十書』所收、『正』七）。

六、『悟眞篇小序』一卷 明・陸西星（『方壺外史』所收、『精』
二）。

七、『悟眞篇集注』三卷 清・仇兆鰲（『精』一）。

八、『悟眞篇闡幽』三卷 清・朱元育注（『輯』奎、『精』三）。

九、『悟眞篇正義』三卷、『外篇』一卷 清・董德寧注
（『精』一）。

十、『悟眞直指』四卷 清・劉一明（『道書十二種』所收）。中
國中醫藥出版社影印本（一九九〇）あり。

十一、『悟眞篇三家注』董『正義』、劉『直指』、朱『闡
幽』を合刊、簡體字鉛印（中國氣功叢書、北京・華夏出版
社、一九八九）。

十二、『悟眞篇淺解』外三種 王沐（道教典籍選刊、北京・中
華書局、一九九〇）。

このうち『悟眞篇三注』に題する薛道光注が實は翁葆光注
の異本であることは、戴起宗の「悟眞篇本末事蹟」附辨、柳
存仁一九七七などに指摘がある。また仇兆鰲、『悟眞篇集注』
は二十五家の注を収集するとともに、仇自身の補注を附して
いる。

以上の注釋に筆者はすべて通曉しているわけではない。た

だ、筆者が繙讀した限りでは、一の『悟眞篇注疏』、七の『悟眞篇集注』、八の『悟眞篇闡幽』、十の『悟眞直指』、十二の『悟眞篇淺解』が優れているように思われる。特に『悟眞篇注疏』は、張伯端の直系である翁葆光（文末の系譜参照）が注し、戴起宗がこれを詳しく疏釋しているという點で、もつとも信頼に値し、かつ理解しやすいテキストであろう。『悟眞篇淺解』は現代の用語で平易に説明しようとする點が評價できる。

『悟眞篇』には、早く元末の張士弘が「此の悟眞篇は、前後の注釋、三十餘家を見るべし」（紫陽真人悟眞篇筌蹄）『悟眞篇三注』序引）と語ったほど、おびただしい注が作られた。その多くは散佚してしまったが、それにしてもこうした事實は、抽象的隱喩に富んだ『悟眞篇』の眞義を窮めることがいかに難しいかを物語っている。注釋の數だけ『悟眞篇』の理論があるという感じさえしないではない。ちょうどそれは、抽象的言辭を散りばめたかの『老子』が、『論語』に倍する注釋群を生み出したことを容易に想起させる。難解さにおいては、もう一つの内丹經典『周易參同契』と、まさに雙壁をなすと言ってもよい。

張伯端『悟眞篇』の研究史と考證（吾妻）

三 基礎理論の檢證

1 基礎理論の核心

『悟眞篇』の内丹理論を見極めるのに必要な作業は、その基本的骨格を抽出してみることである。以下、プロセスの核心段階について考えてみる。

a、『悟眞篇』

心附近(朱・離☲) → 眞陰(汞・龍) → 黃芽☱ → 金丹
腎附近(水・坎☵) → 眞陽(鉛・虎)

身體技法として言えば、心臟附近(☲)にある陰氣(☵)を腎臟附近(☵)にある陽氣(☲)と交合轉換させて、純粹な陽氣(☲)すなわち金丹を作り出すというのである。もつとわかりやすく言えば、心の意念を下丹田に向かって集中させ、それによって體內に一種の熱氣を生み出す、ということであろう。次に『悟眞篇』が影響を受けたと思われる『鍾呂傳道集』および外丹のプロセスを圖示してみる。

b、『鍾呂傳道集』

心液(丹砂・離☲) → 正陽之氣(汞・陽龍) → 黃芽 → 金丹
腎氣(鉛・坎☵) → 眞一之水(銀・陰虎)

c、外丹（『諸家神品丹法』卷一「眞龍眞虎口訣」、『正』三
二）

丹砂 → 水銀（汞・眞龍・太陽）
 黒鉛 → 白銀（鉛・眞虎・太陰）
 ↓
 金丹

まず『鍾呂傳道集』であるが、技法としては『悟眞篇』とまったく變わらないことがわかる。ただ術語の幾つかと陰陽の配當が異なるにすぎない。「龍虎交媾」あるいは「水火交媾」とも呼ばれるこの技法は、後世の内丹理論において特筆大書されて、普遍化する。たとえば『周易參同契發揮』を著わした元初の叡談の『易外別傳』（『正』三四）にこうある。

内鍊の道は至簡至易にして、唯だ心火を降して丹田に入れんと欲するのみ。……腎は水に屬し、心は火に屬す。火、水中に入れば、則ち水火の交媾すること、晦朔の間に日月の合璧するが如し。

元末・王道淵の『崔公入藥鏡註解』（『正』四）にも、「鉛とは、坎中の一點の眞陽にして、之を龍と謂うなり。汞とは、離中の一點の眞陰にして、之を虎と謂うなり」と、龍虎の配當は逆だが、同内容が見える。この技法は『周易參同契』に「夫の雌雄交媾するの時は、剛柔相い結びて解くべから

ず」と言うように、男女の交合イメージによる二元的配合を背景にもっている。

次に掲げた外丹理論は、丹砂すなわち硫化水銀 HgS から水銀 Hg すなわち汞を抽出し、黒色の鉛化合物から鉛 Pb を取り出して、兩者を化合させる方法をあらわす。『諸家神品丹法』は宋代の編纂らしく、『悟眞篇』との先後関係は明らかではないが、唐・金竹波『大丹鉛汞論』（『正』三二）第三や五代後蜀の『大還丹照鑑』の識鉛汞第二（同）、『雲笈七籤』卷六六所收の「丹論訣旨心照」といった外丹書に類似のモチーフがあることからすれば、こうした理論は『悟眞篇』以前にすでに存在していたと見てよい。外丹と一口に言っても、所用の物質は多様であるし、煉丹の過程も複雑さを極めるけれども、「一切萬物の内、唯だ鉛汞の還丹を造るべき有るのみ」（『諸家神品丹法』卷二）と説かれるように、鉛と汞の交合こそはその關鍵にほかならなかった。内丹が外丹の理論を前提にしていることは常識であるが、右のような形で『悟眞篇』は外丹の術語と理論を援用していたわけである。なお、黄芽（黄色の顆粒）ももとは外丹用語で、黄色は鉛丹 PbO もしくは酸化水銀 HgO の色と思われる。

内丹がなぜ外丹の用語を借りる必要があったかについて

は、次の記事が参考になるであろう。

内丹の説……亦た陰陽・八卦・四象・五行・鉛汞・龍虎を説くは、聖人、天機を輕泄するを欲せず、之を託して以て外丹に寓するのみ（南宋、吳悞『指歸集』總叙、『正』三二）。

内景〔體内の形象〕は微妙にして、形無く名無し。聖師、已むを得ずして外丹の名を借り、象りて以て之に譬え、其の理を發明して、人をして悟り易からしむ（明、趙宜眞『原陽子法語』卷上「還丹金液歌並叙」、『正』四〇）。

2 全體のプロセス

さて、『悟眞篇』の中心技法は以上によって明らかになつたと思われる。では、プロセスの全體についてはどうであろうか。細部にわたる技法を解明するのは現段階では不可能であり、ここでは大まかな筋道だけを紹介しておく。

一、翁葆光二段階説（翁葆光注、「悟眞篇注序」、『三乗秘要』所收「悟眞直指詳説」）

①金丹の鍊成（龍虎交媾）↓②金液還丹（小周天）―九轉金液大還丹（性命兼修の完成）

二、仇兆鰲七段階説（『悟眞篇集注』附「悟眞篇提要」）

張伯端『悟眞篇』の研究史と考證（吾妻）

①凝神定息↓②運氣開關↓③保精煉劍↓④採藥築基↓⑤還丹結胎↓⑥火符溫養↓⑦抱元守一

三、李遠國・王沐四段階説（李『道教氣功養生學』、王『悟眞篇淺解』附「悟眞篇丹法要旨」）

①築基↓②煉精化氣↓③煉氣化神↓④煉神還虛

このうち李遠國・王沐説は、元初の李道純が提起し、後世廣く普及した内丹理論にもとづいているらしい。これに對して、仇兆鰲はまた違ったプロセスを説いている。しかし、仇兆鰲にしたところで、自説の根據を特に示しているわけでもない。そもそも李遠國・王沐説にせよ仇兆鰲説にせよ、『悟眞篇』の元來の理論が果たしてこのように整合的ないし緻密なものであったかどうか、はなはだ疑問ではあるまいか。内丹理論の完成段階からする投影をなるべく排除して原文への忠實さを求めるとすれば、やはり翁葆光説および戴起宗説を基本にすべきだと思われる。

3 術語、隱喩について

『悟眞篇』研究の問題點や解讀のための方策は、これまでの記述によっておおむね示すことができたと思う。なお、本書の術語や隱喩については、以下の文獻がある程度の指針を

與えてくれる。

一、南宋・李簡易『悟眞篇指要』一卷（『玉谿子丹經指要』卷上所收、『正』七）

二、南宋・蕭廷芝『金丹問答』一卷（『金丹大成集』所收、『修真十書』卷一〇、『正』七）

三、元・戴起宗『金丹法象』一卷（『紫陽真人悟眞直指詳說三乘祕要』所收、『正』四）

四、元・陳致虛『上陽子金丹大要圖』（『正』四〇）

このうち『悟眞篇指要』は、張伯端に比較的近い時期に作られた要約として有益である。『金丹問答』は内丹の術語について明快な説明を與え、また『金丹法象』と『上陽子金丹大要圖』は、數十種に及ぶ内丹用語を整理したリストを載せている。

このほか、張伯端の他の著作を手がかりにすることも考えられる。『金丹四百字』一卷がそれである。やはり韻文であるが、南宋末の黃自如、明の彭好古、清の劉一明などの注がある（『修真十書』、『正』四〇、『輯』奎、『道書十二種』）。ただし『玉清金笥青華祕文金寶内煉丹訣』（『青華祕文』、『正』七、『輯』奎）は、吾妻重二一九八が論じたように、張伯端の自著ではなく明代の假託と見られるので、慎重に取り扱いたい。

四 『悟眞篇』の時代および若干の考證

ここで『悟眞篇』の時代背景を見るために、關係年表と南宗の系譜を粗略ながら作っておく。

1 『悟眞篇』關係年表

五代

九三三（後唐、長興四） 杜光庭、卒す（八五〇）。

九四七（後蜀、廣政一〇） 彭曉『周易參同契分章通眞義』

成る（『正』三三）。

北宋

九八七（雍熙 四） 張伯端、生まれる。後述参照。

九八九（端拱 二） 陳搏、卒す。後述参照。

一〇一七（天禧 一） 周敦頤、生まれる（一〇七三、『太極圖・圖說』）

一〇一九（天禧 三） 『雲笈七籤』成る。

この頃、鍾呂内丹派の文獻（『鍾呂傳道集』『靈寶畢法』『西山群仙會眞記』）、相繼いで成る。

一〇六九（熙寧 二） 張、陸詵（一〇二二〜七〇）と成都へ

行き、真人から「金丹藥物火候之訣」を授かる（『悟眞篇序』）。後述参照。王安石新法始まる。

一〇七五（熙寧 八）

『悟眞篇』成る（『悟眞篇序』）。

一〇七八（元豐 一）

張、「悟眞篇後序」を書く。

張、元豐年間において劉奉眞らと佛法を宣傳（翁「悟眞篇注序」）。

一〇八二（元豐 五）

張、卒す。九六歳（『歴世眞仙體道通鑑』によれば九九歳）。

程頤、嵩山で張伯端の知友、王筌（佺、字子眞、冲熙處士）に出逢う。後述参照。

一一〇一（建中靖國 一）

蘇軾、卒す（『續養生論』『文集』六四、「龍虎鉛汞論』『文集』七三、「東坡養生集」）。後述参照。

一一一二（政和 二）

王重陽、生まれる（一一七〇、『重陽真人金闕玉鎖訣』『正』四三）。

一一一五（政和 五）

元王眞一、「悟眞篇」を繕寫し「悟眞篇本末事蹟」（『三乗祕要』『正』四）を著わす。

張伯端『悟眞篇』の研究史と考證（吾妻）

一一一六（政和 六）

徽宗、林靈素に通眞達靈先生の號を賜わる。

一一二五（宣和 七）

陸游、生まれる（一一〇九）。北宋が滅亡、南宋成立。

一一二七（靖康 二）

朱熹、生まれる（一一〇〇、「調息箴』『文集』八五、『周易參同契考異』）。

南宋

一一三〇（建炎 四）

後述参照。

一一四八（金、皇統 八）

邱處機、生まれる（一一二七、『大丹直指』『正』七）。

一一五二（紹興 二二）

劉永年（翁葆光の師）、彭曉の『周易參同契分章通眞義』を刊行（『悟眞篇注疏序』所引空玄子按語）。

一一五五（紹興 二五）

『道樞』の著者曾慥、卒す。

一一五八（紹興 二八）

石泰、卒す（一〇二二？）、『歴世眞仙體道通鑑』四九。

一一六二（紹興 三二）

葉士表注成る（『三乗祕要』）。

一一七三（乾道 九）

翁葆光注成る（『悟眞篇注序』）。

一一九一（紹熙 二）

薛道光、卒す（一〇七八？）、『歴世眞仙體道通鑑』四九）。

一一九四(紹熙 五) 白玉蟾、生まれる。

一一〇二(嘉泰 二) 袁公輔注成る。葉士表注を批判(『三乘秘要』。後述参照)。

陳楠、卒す(『歷世眞仙體道通鑑』四九)。

一一一三(嘉定 六) 龍眉子『金液還丹印證圖』成る(『正四』)。

夏宗禹注成る(真徳秀序)。後述参照。

一一二七(寶慶 三) 王夷、陳顯微の『周易參同契解』を刊行(『正』三四)。

黃自如『金丹四百字注』成る(『修真十書』『正』七、『正』四〇)。

一一三四(端平 一) 周無所住『金丹直指』成る(『正』四〇)。

李簡易『悟眞篇指要』成る(『玉谿子丹經指要』所收、『正』七)。

一一四一(淳祐 一) 南宋が滅亡。

趙道一『歷世眞仙體道通鑑』成る

一一五〇(淳祐 一〇) 趙道一『歷世眞仙體道通鑑』成る

一一六四(景定 五) 趙道一『歷世眞仙體道通鑑』成る

一一七九(祥興 二) 趙道一『歷世眞仙體道通鑑』成る

一一九四(至元 三) 趙道一『歷世眞仙體道通鑑』成る

一一〇六(大徳 一〇) この頃、李道純『中和集』成る(『正』七)。

一一三〇(至大 三) 俞琰『周易參同契發揮』成る(『正』三四)。

一一三五(至元 一) 戴起宗疏成る(『悟眞篇注疏序』)。陳致虚『上陽子金丹大要』成る(『正』四〇)。

以下、興味深い事項について幾つかコメントを加え、注意を喚起しておく。

(一) 張伯端の生年は翁葆光「悟眞直指詳説」による。元初・趙道一の『歷世眞仙體道通鑑』卷四九は、元豊五年、九歳で卒したとするから九八三年(教えでは九八四年)生まれということになるが、九九歳という数字にはいかにも作爲が感じられる。王沐一九九〇のように、この説をとる例が時おり見受けられるが、従いがたい。

(二) 五代宋初の傳説的な道士陳搏が、張伯端の出生とほとんど入れ違いに卒していることは、道教史を考える際、記憶されてよいことであろう。

(三) すでに指摘があるように、張伯端に「金丹藥物火候之

訣」を授けたという成都の眞人はその後、翁「悟眞篇注序」で青城丈人と呼ばれ、さらに『歷世眞仙體道通鑑』では、實は劉海蟾であったとされる。こうして道家南宗の系譜が作成整頓されていくわけであるが、張伯端と劉海蟾の關係は陸詵の孫、陸思誠の「悟眞篇記」(『悟眞篇三注』卷首)にすでに示唆されている。元中期の蕭廷芝の「大道正統」(一三二〇年、『道德眞經三解』序所收、『正』二〇)や陳致虛の『上陽子金丹大要』卷一になると、劉海蟾―張伯端という系譜がはっきり立てられて、以後定式化する。

(四) 程頤が王筌に出逢った元豐五年の年次は、姚明達『程伊川年譜』(商務印書館、一九三七年)による。程頤はこの時、嵩山に住む王筌から丹藥を送られ、「王侔期の丹を寄するに謝するの詩」(『程氏文集』八)という詩を作った。また次の記事もある。

王子眞、曾て藥を寄せ來たる。某、以て他に答うる無し。某、素より詩を作らざるも、亦た是れ禁止して作らずには非ず。但だ此の閑言語を爲るを欲せざるなり。

……今、王子眞に謝するの詩を寄せて云う……(『程氏遺書』一八一―231)。

ここに語られるように、程頤は平生、詩作を好まなかった。

張伯端『悟眞篇』の研究史と考證(吾妻)

彼が残したわずかな詩のうちの一つが張伯端の理解者であった王筌と關わりをもつということは、たいへん興味深い。このことは他に『程氏遺書』卷一八一―58、『程氏外書』卷一一―99のほか、『困學紀聞』卷一八、『能改齋漫錄』卷一一「程正叔不欲爲閑言語」にも言及がある。王筌は字は子眞、元豐年間(神宗から沖熙(沖照)處士の號を賜わった人物で、日頃「金丹の術」は張伯端だけが理解していると言っていた(『續資治通鑑長編』卷四八四、陸思誠「悟眞篇記」)。元符三年(一一〇〇)に茅山に遊び、『上清錄』を授かったという。傳記は『歷世眞仙體道通鑑』卷五二、『茅山志』卷一六、『悟眞篇注疏』卷一(五a―七a)に見え、北宋・龔原の詩「王筌に贈る」が『宋詩紀事』卷二七に載っている。

(五) 蘇軾の「續養生論」と「龍虎鉛汞論」には、先述した龍虎交媾理論がはっきり説かれている。鍾呂内丹派あるいは『悟眞篇』の内丹理論が當時の士大夫の中に浸透していたことを窺わせる資料と言える。

(六) 朱熹と内丹の關係については、三浦國雄一九八三、吾妻重二一九八四を参照されたい。

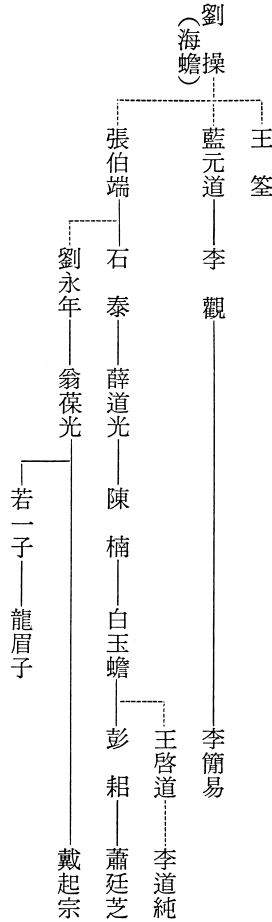
(七) 袁公輔が葉士表注を批判したことは、すでに宋代の注釋者の間で解釋の當否をめぐる對立があったことを物語る。

『悟眞篇』は當時にあつても難解なもの、多義的なものであつたのである。

丹の結びつきを示す好例である。この序は『眞西山文集』卷三五にも收められている。

(八) 夏宗禹注に眞徳秀が序を書いたことは、儒者と道教内

2 道家南宗系譜略(本稿でとり上げた人物に限定した。……は師承関係が不明瞭なもの)



附 文献リスト

I 研究文献

- 劉師培一九三四 「讀道藏記」(『劉申叔先生遺書』戊類)
- デービス一九三九 Tenney L. Davis and Chao Yün-t'ung, "Chang Po-tuan of T'ien-t'ai, His Wu Chen P'ien, Essay on the Understanding of the Truth. A Contribution to the Study of Chinese Alchemy", *Proceedings of the American Academy of Arts and Sciences* 73.
- 宮川尚志一九五四 「劉一明の悟眞直指について」(『岡山大學法文學部學術紀要』三)
- 今井宇三郎一九六一 「道家南宗の系譜について」(『漢魏文化』二)
- 今井宇三郎一九六二 「悟眞篇の成書と思想」(『東方宗教』一九)
- 柳存仁一九七七 「張伯端與悟眞篇」(『吉岡博士還曆記念道教研究論集』圖書刊行會)

陳兵一九八五「金丹派南宗淺探」(『世界宗教研究』一九八五—四)

クリフラー一九八七 Chang Po-tuan, *Understanding Reality: A Taoist Alchemical Classic, with a Concise Commentary by Liu I-ming*, tr. by Thomas Cleary, University of Hawaii Press.

*F. Baldrian-Hussein, Review of T. Cleary 1987. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 50.1, 1990.

福井文雅一九八七「『悟眞篇』の構成について」(『東方宗教』七〇)

吾妻重二一九八八「『悟眞篇』の内丹思想」(坂出祥伸編『中國古代養生思想の總合的研究』平河出版社)

宮澤正順一九八八「『道樞』悟眞篇と張平叔の『悟眞篇』について」(『大正大學中國學研究』七)

卿希泰一九八八「關於紫陽派形成問題芻議」(『道教文化新探』四川人民出版社)

李明叔一九八八「論《悟眞篇》的道禪合流傾向」(『宗教學研究』一九八八—四)

李遠國一九八八『道教氣功養生學』(四川省社會科學院出版社)

李養正一九八九『道教概說』(北京・中華書局)

丁貽莊一九八九「從《參同契》到《悟眞篇》」(『社會科學研究』一九八九—二)

張伯端『悟眞篇』の研究史と考證(吾妻)

任繼愈一九九〇『中國道教史』(主編、上海人民出版社)

王沐一九九〇「悟眞篇丹法要旨」(『悟眞篇丹法源流』(『悟眞篇淺解』北京・中華書局)

徐兆仁一九九一『道教與超越』(中國華僑出版公司)

任繼愈一九九一『道藏提要』第一四一—一四六條(主編、中國社會科學出版社)

樊光春一九九一「張伯端生平考辨」(『中國道教』一九九一—四)

嚴振非一九九二「《悟眞篇》成書地點考證」(『中國道教』一九九二—四)

卿希泰一九九二『中國道教史』第二卷(主編、四川人民出版社)

○その他の歐米文獻
Tenny L. Davis and Chao Yin-t'ung, "Chang Po-tuan, Chinese Alchemist of the Eleventh Century", *Journal of Chemical Education*, 16, 1939.

——, "Four Hundred Word Chin Tan of Chang Po-tuan" and "Three Alchemical Poems by Chang Po-tuan", *Proceedings of the American Academy of Arts and Sciences* 73, 1940.

F. Baldrian-Hussein, "Chang Po-tuan". In Herbert Franke, ed. *Song Biographies II*, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1976.

Judith M. Boltz, "The Ex Post Facto Nan-tsung (Southern Lineage)" and "The Hsiu-Chen Shih-shu". In Judith M. Boltz, *A Survey of Taoist Literature, Tenth to Seventeenth Centuries*, Berkeley: University of California, 1987.

II 関連文献

マンスロー一九三七 H. Maspero, Les procédés de "Nourrir le principe vital" dans la religion taoïste ancienne, *Journnal Asiatique*. 持田季末子譯『道教の養生術』「せりか書房」一九八三)

陳國符一九六三「中國外丹黃白術考論略稿」『說周易參同契與內丹外丹』、『道藏源流考』(北京・中華書局) 所收

今井宇三郎一九六三「金丹道教研究—南宋の道士白玉蟾の思想」(『東京教育大學文學部紀要・國文學漢文學論叢』八)

ストリックマン一九七五「宋代の雷儀—神霄運動と道家南宗についての略説」(安部道子譯、『東方宗教』四六)

宮川尚志一九七八「南宋の道士白玉蟾の事蹟」(『内田吟風博士頌壽記念東洋史論集』)

陳國符一九八三『道藏源流續攷』(臺灣・明文書局)

馬濟人一九八三『中國氣功學』(陝西科學技術出版社)。淺川要らによる邦譯あり(東洋學術出版社、一九九〇)

三浦國雄一九八三「朱子と呼吸」(金谷治編『中國における人間性の探求』創文社)

ニーダム一九八三 J. Needham, *Science and Civilisation in China, vol. 5, part 5: spagyrical discovery and invention: physiological alchemy*, Cambridge University Press.

フヤン一九八四 F. Baldrian-Hussein, *Procédés Secrets du Joyau Magique; Traité d'Alchimie Taoïste du XI^e siècle, Les Deux Océans, Paris.*

*福井文雅書評「養生思想に關する歐米の研究」(前掲『中國古代養生思想の總合的研究』)

吾妻重二一九八四「朱熹『周易參同契考異』について」(『日本中國學會報』三六)

李遠國一九八五「道教氣功與內丹術研究—歴史的陳述」(『道教研究文集』, 四川省社會科學院)

坂内榮夫一九八五「鍾呂傳道集」と内丹思想」(『中國思想史研究』七)

陳兵一九八六「元代江南道教」(『世界宗教研究』一九八六一二)

馬曉宏一九八六「呂洞賓神仙信仰溯源」(『世界宗教研究』一九八六一三)

クリアリー一九八六 *The Inner Teachings of Taoism, Chang Po-tuan, commentary by Liu I-Ming, tr. by Thomas Cleary, Shambhada, Boston & London.*

*劉一明『金丹四百字解』(『道書十二種』所收)による英譯。

王家祐一九八七 「論李道純の内丹學說」(『道教論稿』、巴蜀書社)

李遠國一九八七 『氣功精華集』(中華傳統養生叢書、巴蜀書社)

石田秀實一九八七 『氣・流れる身體』(平河出版社)

*吾妻重二書評「斬新な道教思想研究」(『東方』八五、一九八八)

伊藤光遠一九八七 『煉丹修養法』(復刻、谷口書店、坂出祥伸解説。もと實業之日本社、一九二七)

坂出祥伸一九八八 「隋唐時代における服丹と内觀と内丹」(前掲『中國古代養生思想の總合的研究』)

三浦國雄一九八八 「文人と養生―陸游の場合」(前掲『中國古代養生思想の總合的研究』)

勞榦一九八八 「道教中外丹與内丹的發展」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』五九―四)

孟乃昌一九八九 a 「說中國煉丹術内外丹之關係」(『上海道教』一九八九―一・二)

孟乃昌一九八九 b 「說中國煉丹術内外丹之關係(續)」(『上海道教』一九八九―三・四)

孟乃昌一九九〇 a 「說中國煉丹術内外丹之關係(再續)」(『上海道教』一九九〇―一・二)

孟乃昌一九九〇 b 「道家内丹術(氣功)理論概念的由來和運用」(『中國道教』一九九〇―一)

張伯端『悟真篇』の研究史と考證(吾妻)

李遠國一九九〇 「鍾呂金丹派丹理概述」(『上海道教』一九九〇―一・二)

横手裕一九九〇 「全真教の變容」(『中國哲學研究』二)

蜂谷邦夫一九九二 『金代道教の研究』(汲古書院)

注

(1) 本稿の大筋は、一九九二年十一月、京都・樂友會館で開かれた坂出祥伸教授主宰の第六回内丹研究会で報告したことがある。歐米の研究についてはリビア・コーン教授から教えを受けた。感謝申し上げたい。

(2) 中野美代子氏は「ドーキョー」か「タオイズム」か(『東方』一五四、一九九三)で本書を高く評價しておられるが、承服しかねる。

(3) 王沐一九九〇などは、以上の注釋者について清修派、雙修派に分けているが、歴史的にどれほど正確な規定なのか、筆者にはわからない。

(4) 「眞龍者、是丹砂中水銀也。因太陽日晶降泄眞氣、入地而生也。名曰汞。眞虎者、是黑鉛中白銀也。因太陰月華降泄眞氣、入地而生。號曰鉛」とある。

(5) 煉精化氣、煉氣化神、煉神還虚という用語は、李道純の『中和集』(『正』七)に見える。その後、この理論は元末の陳致虚を経て清初の伍守陽へと繼承された。王沐一九九〇、二九九頁以下参照。

(6) ここでは王侏期と言っているが、『遺書』卷一八―58の原注では王侏と言っているので、程頤の勘違いと思われる。

附記 脱稿後、孟乃昌氏の『周易參同契考辨』（上海古籍出版社、一九九三年）を入手した。氏の主要論文を集めていて便利である。